



KANSAI UNIVERSITY



# CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

# Newsletter



関西大学 教育開発支援センター  
ニュースレター

June 2017

vol. 24



## 胸の理性・頭の理性

教育開発支援センター長 田中 俊也



人間は、機械と異なり、物理的・社会的環境世界と接しているうちに「知識」を獲得し、やがてその「知識」そのものが知的環境世界として厳然とあとからの人間の前に立ち現れることになる。始めに世界があり、やがて世界ができ、ついには学ぶ対象としての世界となる。

1人の人間の知的発達過程を眺めてみよう。赤ちゃんとしてこの世に生まれた段階では、まさに物理的（ベビーベッドの周りのもの）・社会的（母親を始めとした人に関するもの）環境に接し、そこから得られる情報（多くは感覚・運動的情報）が知識の源となる。その知識は快・不快に代表されるような感情や情動中心の知識である。こうした物理的・社会的環境は成人しても老年になってもいつまでも継続する。したがって、そこから形成される知識は、どの年齢層においても本人にとってはきわめて根拠のある、生々しさを抱えた知識である。海外留学で現地にとっぷりつかると経験がこれにあたる（レベル0の世界）。やがて人間は、モノ・ヒト全体との直接的な

関わりから徐々に離脱し、さまざまな代用経験から知識を獲得していくこともできるようになる。現実そのものではないがきわめてそれに近い物理的・社会的環境がつけられた時にはそこでも知識・スキルの獲得ができる。イメージ、シミュレーションの環境の中での経験がこれにあたる（レベル1の世界）。ここではまだ、モノ・ヒトの世界との直接経験から得られる、モノ・ヒトに対する感情的なレベルの知識である。これらを胸の理性（ゾーン・根拠）としよう。

一方で人間は固有の「表象」活動を行うものである。モノ・ヒトそのものではなく、それへのイメージや概念といった、モノ・ヒトから一步離れた世界を持つこともできる。それらに、自分なりの勝手なラベルを貼って思考をする世界に入る。自分なりの勝手なラベルなので、他の人とのコミュニケーションは難しいが、自分が生きている世界のことがらに対して、旺盛な好奇心を持ち爆発的に知識を増やそうと自主的に努力し、事実増えていく（レベル2の世界）。

この、つけたラベルが公共につかえるようになったのがシンボルとしての言語・数値・記号である。逆に言語や数値・記号の使い方の文法（シンタックス）を学べば、他者と共有できる、効率的な知識が獲得できる。いわゆるシンボル操作が自由にできる世界である（レベル3の世界）。ただし、「リンゴ3個とみかん4個あわせていくら?」という問いに平気で「7円!」と答えたり、「みつからない」と「なかった」のは同じという論理を振りかざしたりするという危うさを持つ世界でもある。

この、レベル3の世界（頭の理性の世界）は、その獲得を目指すのが教育の目的の1つでもあるが、記号操作の力に長けた人間の形成だけが大学教育での大きな目的だとも考えられない。非効率だが、レベル2の世界にひたる環境を確保しつつレベル3の世界に誘っていくことのほうがより重要なことではないか、と、ラーニングコモンズでの学生の熱心な活動を微笑みながら観察している。